

## 幼稚園・保育園(所)における障害児の保護者に対する支援 その2 —中堅保育者を対象に行った予備調査結果—

岸本 美紀\* 武藤 久枝\*\*

### 要 旨

本研究では、障害児の保護者支援においてうれしかったこと、保護者の気持ちの理解や工夫について、中堅保育者の回答に焦点を当てて分析し、園長経験者と若手保育者(保育歴5年未満)の回答と比較した。うれしかったことの2次カテゴリ6項目のうち、「障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成」「障害児の育ちを保護者と共有」「保護者の姿勢の変化」、障害児の保護者に対する気持ちの理解や工夫の2次カテゴリ7項目のうち「聞く」「子どもの様子を知らせる」「気遣い」「寄り添う」「障害に対する考えや意向を把握」で1次カテゴリが出現した。園長経験者と若手保育者の回答と比較した結果、うれしかったこと、保護者の気持ちの理解や工夫ともに中堅保育者の特徴が示唆された。

キーワード：障害児の保護者支援、中堅保育者、面接調査

### I. はじめに

厚生労働省(2023)によると、令和3(2021)年度21,143箇所(園)の保育所で、86,407人の障害児を受け入れている<sup>1)</sup>。その5年前の平成28(2016)年度と比較すると、障害児を受け入れている園数は4,661園、障害児数は21,689人増加している<sup>2)</sup>。平成28(2016)年度から令和3(2021)年度にかけては、保育所等数は3,750箇所、利用児童数は134,205人増加しており<sup>3)</sup>、障害児を受け入れている保育所等の割合は、62.8%から70.5%、利用児童に占める受入障害児の割合は、2.7%から3.3%と、いずれも増加している<sup>4)</sup>。このことから、コロナ禍により少子化が予想以上に加速している現状にもかかわらず、障害児を受け入れている保育所等が増加しているだけでなく、保育所等で園児における障害児が占める割合が高くなっていることがうかがえる。

令和5(2023)年に「今後の仕事と育児・介護の両立支援に関する研究会」が開かれ、障害児を育てる保護者の仕事と育児の両立が検討され始めたが<sup>5)</sup>、今後両立が実現することで、幼稚園や保育園(所)等で過ごす障害児が増える可能性が高まり、かつ、障害児の保護者の子育て支援における質の重要性が高まると推察される。このような現状がある一方で、障害

児の保護者支援に関する研究では、支援内容や支援に関する保育者の意識について十分検討がなされていない現状があると考えられたため、筆者らは、保育所保育指針に示される障害児の保護者支援のあり方が実際どのように展開されているのかを園長経験者の回答から分析した(岸本他：2020)<sup>6)</sup>。また、障害児の保護者支援の現状や特徴を把握するため、園長経験者や、若手保育者に面接調査を行い、障害児の保護者支援で抱く困難感、うれしかったこと、保護者の気持ちの理解や工夫に焦点を当て、分析を行った(岸本他：2022)<sup>7)</sup>、(岸本他：2023)<sup>8)</sup>。その結果、障害児の保護者支援の特徴や職種の違いによる特徴が示唆された。

岸本他(2023)<sup>9)</sup>では、中堅保育者をA自治体の現任保育士研修や吉田他(2015)<sup>10)</sup>を参考にして、保育歴6年以上から園長・主任等園の管理職に就く前の保育者と設定した上で、中堅保育者の障害児の保護者支援で抱く困難感について調査し、園長経験者、若手保育者の結果との比較を行った。その結果、中堅保育者では園長経験者または若手保育者の結果と似た結果を示す項目があった一方で、どちらも類似しない中堅保育者独自の特徴もみられた<sup>11)</sup>。

本研究でも、中堅保育者を岸本他(2023)<sup>12)</sup>と同様に保育歴6年以上から園長・主任等園の管理職に就く

\*岡崎女子大学 \*\*中部大学

前の保育者とする。

岩立他(1997)<sup>13)</sup>に準じて保育者を新任保育者(保育歴 0～5 年)、中堅保育者(6～15 年)、熟練保育者(16 年以上)に分け、保育における気付き体験について分析した吉田他(2015)では、保育経験年数に関わらず共通する特徴と経験年数による特徴があることが示唆され、中堅保育者については、子どもだけでなく、周囲の環境へも意識が向き、自分で変えていこうとする姿が見られた<sup>14)</sup>。

以上から、岸本他(2023)<sup>15)</sup>の結果を踏まえ、本研究では、中堅保育者の障害児の保護者支援でうれしかったこと、保護者の気持ちの理解や工夫に焦点を当て、障害児の保護者支援の特徴を明らかにすることを第一の目的とする。第二の目的は、障害児の保護者支援における困難感については中堅保育者の特徴がうかがえたため、うれしかったこと、保護者の気持ちの理解や工夫においても、中堅保育者の特徴が見られるのかを明らかにすることである。

## II. 方法

### 1. 対象

個人的に依頼を行った中堅保育者 5 名。全員女性である。

<保育歴>

保育歴は、8～14 年(平均 11.6 年)であった。

### 2. 方法

#### (1)調査方法

中堅保育者に対して、障害児の保護者支援に関する半構造化面接を個別に行った。調査期間は、令和 4(2022)年 11 月～12 月である。

主な質問項目は、障害児の保護者支援で難しかったこと、困ったこと、A.うれしかったこと、B.保護者の気持ちの理解や工夫などである。対象者の了承を得た上で、面接内容を IC レコーダーに録音し、逐語記録を作成した。

#### (2)分析方法

質問内容のうち、中堅保育者の障害児の保護者支援で難しかったこと、困ったことについては、岸本他(2023)<sup>16)</sup>で既に報告した。本研究では A.うれしかったこと、B.保護者の気持ちの理解や工夫を分析対象とする。

中堅保育者の回答から、障害児の保護者支援につ

いて、A.うれしかったこと、B.保護者の気持ちの理解や工夫に関する記述を整理し、分析を行った。また、園長経験者と若手保育者の結果と比較を行った。

#### ① 1 次カテゴリーの設定

逐語記録の内容を表すカテゴリー(以下、1 次カテゴリー)を作成した。1 人の回答者の逐語記録の中に複数の意見が列挙されている場合は、それぞれ独立したものとして分類した。

##### A.うれしかったこと

13 個の 1 次カテゴリーを設定した。

##### B.保護者の気持ちの理解や工夫

16 個の 1 次カテゴリーを設定した。

#### ② 2 次カテゴリーの設定

##### A.うれしかったこと

13 個の 1 次カテゴリーを岸本他(2023)<sup>17)</sup>の「障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成」「障害児の保護者からの働きかけ」「保護者同士の交流」「障害児の成長を実感」「障害児の育ちを保護者と共有」「保護者の姿勢の変化」の 6 つの 2 次カテゴリーに基づき、分類した。

##### B. 保護者の気持ちの理解や工夫

16 個の 1 次カテゴリーを岸本他(2023)<sup>18)</sup>の「きっかけづくり」「聞く」「子どもの様子を知らせる」「気遣い」「寄り添う」「障害に対する考えや意向を把握」「本音」の 7 つの 2 次カテゴリーに基づき、分類した。

#### ③再分類化

面接調査の逐語記録を読み直し、設定した 2 次カテゴリーに分類し直した。

#### ④園長経験者と若手保育者の結果との比較

A.うれしかったこと、B.保護者の気持ちの理解や工夫それぞれについて、園長経験者と若手保育者の結果(岸本他、2023)<sup>19)</sup>と比較し、中堅保育者の特徴の把握を試みた。

## 3. 倫理的配慮

面接調査は、平成 30(2018)年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会の承認を得た(通知番号 32)。また、対象者に対しては、研究の趣旨、個人情報取り扱い等を説明し、同意書の記入を求めた。

## III. 結果及び考察

### 1. 障害児の保護者支援でうれしかったこと

中堅保育者が障害児の保護者支援でうれしかった

ことについて、岸本他(2023)<sup>20)</sup>に基づき、1次カテゴリーの抜粋を園長経験者と若手保育者の結果と合わせて表1に示すとともに、6個の2次カテゴリーについて、以下に考察を行う。

(1)障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成

「(保護者に)心を開いてもらえたと思う時」「先生のおかげ』と言われた」などが設定され、中堅保育者において最も1次カテゴリー数が多く(10個)、中堅保育者で出現した1次カテゴリー数全体の76.9%を占めた。

表1 障害児の保護者支援でうれしかったこと

岸本他(2023)に加筆

2次カテゴリー	個数 (%)	1次カテゴリー (抜粋)					
		園長経験者	個数 (%)	若手保育者	個数 (%)	中堅保育者	個数 (%)
① 障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成	18 (56.3)	・母親の心の拠り所になれたと感じた	5 (45.5)	・再度担任になった時、保護者から安心してもらえた	3 (37.5)	・(保護者に)心を開いてもらえたと思う時 ・「先生のおかげ」と言われた	10 (76.9)
② 障害児の保護者からの働きかけ	1 (3.1)		0 (0.0)	・少しずつ子どもを伝えていたら、保護者の笑顔や話しかけることが増えた	1 (12.5)		0 (0.0)
③ 保護者同士の交流	2 (6.3)	・数年後、健常児の母親の仲間に入っていて、一緒に食事会に参加できた	2 (18.2)		0 (0.0)		0 (0.0)
④ 障害児の成長を実感	1 (3.1)		0 (0.0)	・家庭での姿を聞き、子どもの普段の姿が園でも出るようになったことがわかった	1 (12.5)		0 (0.0)
⑤ 障害児の育ちを保護者と共有	5 (15.6)	・子どもの育ちを保護者と共有できた時	2 (18.2)	・子どもができるようになったことを母親と一緒に喜べた	2 (25.0)	・保護者と子どもの成長の喜びを共感できたこと	1 (7.7)
⑥ 保護者の姿勢の変化	5 (15.6)	・両親で子どものことを理解し合っている姿が見えた時	2 (18.2)	・発表会で、子どもの姿を見て、保護者が喜んでいた	1 (12.5)	・子どもが頑張っている姿を見て、保護者が喜んでくれた	2 (15.4)
合計	32 (100)		11 (100)		8 (100)		13 (100)

「障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成」は、園長経験者(5 個、45.4%)、若手保育者(3 個、37.5%)でも最も 1 次カテゴリー数が多い 2 次カテゴリーであったが、中堅保育者においては、園長経験者と若手保育者と比べると 1 次カテゴリー数が倍以上となり、出現率も約 30%以上高い結果となった。この結果から、とりわけ中堅保育者にとって、障害児の保護者との意思疎通や信頼関係が形成は、うれしさを感じる重要な要因であることが推察される。

本研究では、中堅保育者 5 名の結果であるため、今後対象者を増やしての分析が必要であるが、吉田他(2015)<sup>21)</sup>において、中堅保育者が子どもだけでなく、周囲の環境へも意識が向き、自分で変えていこうとする姿が見られたことから、本研究の中堅保育者も保育の経験を重ね、子どもを取り巻く環境である保護者に対して意識が向き、働きかけた結果として関係が築かれたことがうれしく思ったのではなかろうか。

## (2)障害児の保護者からの働きかけ

中堅保育者では、1 次カテゴリーが出現しなかった。園長経験者でも 1 次カテゴリーが出現せず、若手保育者では 1 個出現した。この「障害児の保護者からの働きかけ」について、若手保育者に特有のカテゴリーであるのかを明らかにすることや 2 次カテゴリー設定の妥当性について、対象者を増やして検討する必要がある。

## (3)保護者同士の交流

中堅保育者では、若手保育者と同じく 1 次カテゴリーが出現しなかった。園長経験者では 2 個出現したが、「保護者同士の交流」についても、園長経験者特有の 2 次カテゴリーであるのか、また 2 次カテゴリーの設定が妥当であったのかについて、対象者を増やして検討する必要がある。しかし、外国籍の保護者支援で園長経験者がうれしかったことについて分析した岸本他(2022)でも、「保護者同士の交流」において 1 次カテゴリーが出現している<sup>22)</sup>。担任保育者は、主に日々一対一で保護者に対応しているのに対して、園長は園全体の様子を捉え、保護者会などで保護者同士の関係を把握する立場にあることから、その影響が推察される。

## (4)障害児の成長を実感

中堅保育者では、1 次カテゴリーが出現しなかつ

た。園長経験者でも出現せず、若手保育者では 1 個出現した。「障害児の成長を実感」についても、「保護者同士の交流」と同様な検討が必要であるが、中堅保育者は、6 つの 2 次カテゴリーの内半分の 3 個しか出現せず、うれしく思う項目が偏った結果になった。この点について、中堅保育者保育者の特徴であるのか、詳細な検討が必要である。

## (5)障害児の育ちを保護者と共有

「保護者と子どもの成長の喜びを共感できたこと」1 個(7.7%)の 1 次カテゴリーが出現した。障害児の成長を保護者と共有・共感できたことがうれしかったことがうかがえる。

園長経験者と若手保育者ともに 2 個の 1 次カテゴリーが出現し、これらよりは割合が低いものの中堅保育者においても 1 次カテゴリーが出現したことから、障害児の成長を喜び合えることが、保育者の保護者支援でのうれしさにつながっていることがうかがえる。保育所保育指針解説(以下、指針解説)(2018)では、保育所における保護者に対する子育て支援において、保護者と連携して子どもの育ちを支える視点として、「子どもの育ちを保護者と共に喜び合うことを重視する。」ことが挙げられている<sup>23)</sup>。障害児の保護者支援において、子どもの育ちを共に喜び合うことが、保育者の支援のあり方として必要であるだけでなく、保育者のうれしさにつながっているのではなかろうか。

## (6)保護者の姿勢の変化

「子どもが頑張っている姿を見て、保護者が喜んでくれた」など、2 個(15.4%)の 1 次カテゴリーが出現し、2 番目に出現数が多かった。中堅保育者も、障害児に対する保護者の姿勢が変化したことをうれしく思っていることがうかがえる。

園長経験者では 2 個(18.2%)と若手保育者でも 2 個(12.5%)の 1 次カテゴリーが出現しており、職位や保育経験によってほとんど差が見られなかった。出現率は高くないものの、職位や保育歴によらず支援を通して保護者の障害児に対する姿勢が変化することは、保育者にとってうれしいことが推察される。

## 2. 障害児の保護者の気持ちの理解や工夫

中堅保育者が障害児の保護者支援で行っていた保護者の気持ちの理解や工夫について、出現した 16 個の 1 次カテゴリーを岸本他(2023)<sup>24)</sup>の 7 個の 2 次カ

テゴリーに分類し、抜粋を園長経験者と若手保育者の結果と合わせて表2に示す。以下、7個の2次カテゴリーについて考察を行う。

(1)きっかけづくり

中堅保育者では、1次カテゴリーが出現しなかった。園長経験者では、4個(20.0%)、若手保育者では

表2 障害児の保護者の気持ちの理解や工夫

岸本他(2023)に加筆

2次カテゴリー	個数 (%)	1次カテゴリー					
		園長経験者	個数 (%)	若手保育者	個数 (%)	中堅保育者	個数 (%)
①きっかけづくり	5 (10.2)	・コミュニケーションを多くとる	4 (20.0)	・なるべくこまめに働きかける	1 (7.7)		0 (0.0)
②聞く	13 (26.5)	・できるだけ聞き役になる	3 (15.0)	・聞き役になる	4 (30.8)	・母親の考えを先に聞くのは大事 ・なるべく意見に耳を傾ける	6 (37.5)
③子どもの様子を知らせる	7 (14.3)	・子どものいいところを見つけて、保護者と話すようにした	1 (5.0)	・子どものできることを褒めた	4 (30.8)	・子どもができるようになったことをよく言う ・様子を細かく伝えること	2 (12.5)
④気遣い	10 (20.4)	・保護者の自信を失わせないようにする言い方をした	3 (15.0)	・保護者の考え方を否定しない	2 (15.4)	・前向きになることをなるべく伝える ・要望を一方向的に言わない	5 (31.2)
⑤寄り添う	9 (18.4)	・保護者の思いに寄り添う	5 (25.0)	・保護者の大変な状況を労う	2 (15.4)	保護者の辛い気持ちを分かるように意識している ・園に連れてきてくれたことをまず受け止める	2 (12.5)
⑥障害に対する考えや意向を把握	3 (6.1)	・日常の会話から、保護者の思いを把握するようにした	2 (10.0)		0 (0.0)	・保育者に求めていること、子どもの伸ばしたいことを、過程を聞いて理解できるようにした	1 (6.3)
⑦本音	2 (4.1)	・保護者が本音を出せるようにしていった	2 (10.0)		0 (0.0)		0 (0.0)
合計	49 (100)		20 (100)		13 (100)		16 (100)

1個(7.7%)出現した。

新任保育士が感じる保育の難しさについて分析した入江(2013)では、インタビュー結果から「保護者への声かけ」がコードとして付与され、概念カテゴリ「保護者への対応」の45.5%を占めた<sup>25)</sup>。この結果から、新任保育士が保護者に対する声かけを「難しい」と感じるほど意識していることがうかがえる。また、園長は立場上、意識して障害児の保護者に働き掛けていることが推察される。それに対して、中堅保育者は、クラス担任として日常的に保護者と関わることが多いため、特別に意識することなく、自ら働きかけたりコミュニケーションを取ったりしていることが、中堅保育者で1次カテゴリが出現しなかった理由として考えられるのではなからうか。

## (2)聞く

「母親の考えを先に聞くのは大事」「なるべく意見に耳を傾ける」など、6個(37.5%)の1次カテゴリが出現し、最も1次カテゴリ数が多かった。

園長経験者では3個(15.0%)、若手保育者では4個(30.8%)1次カテゴリが出現し、若手保育者では「子どもの様子を知らせる」と同数で最も1次カテゴリ数が多かった。中堅保育者の出現率は若手保育者と似た結果であった。中堅保育者、若手保育者は、障害児の保護者の話を聞くことをより意識していることがうかがえる。園長経験者の出現率は中堅保育者、若手保育者よりも低いものの、1次カテゴリ数は似たような結果であった。頻繁に保護者と接する中堅保育者、若手保育者が、保護者の話を聞くことを意識して対応していることが影響しているのではなからうか。指針解説(2018)では、第4章2(1)保護者との相互理解について、保育士等と保護者間で子どもに関する情報の交換を細やかに行うことが必要であるとされている<sup>26)</sup>。本研究の結果から、保護者の気持ちの理解のために、保育歴や立場に関わらず、保育者が障害児の保護者の話を聞くことを大切にしていることがうかがえる。

## (3)子どもの様子を知らせる

「子どもができるようになったことをよく言う」「様子を細かく伝えること」の2個(12.5%)の1次カテゴリが出現した。

園長経験者では1個(5.0%)、若手保育者では4個(30.8%)の1次カテゴリが出現した。若手保育者では「聞く」と同数であり、最も1次カテゴリ数が

多かった。1次カテゴリの総数に占める割合から見ると、中堅保育者の結果は園長経験者の結果に似ていた。しかし、実際の保育では、中堅保育者の方が、担任をしていることが多いことから、保護者に子どもの様子を知らせる機会が園長経験者より多く、どちらかと言えば、若手保育者に近いことが推察される。そのため、中堅保育者と若手保育者で出現率に差が出た要因について、分析が必要である。

また、保育者の回答からは、保育歴や職位に関わらず、ただ子どもの様子を伝えるだけでなく、子どもができるようになったことやいいところを伝えようとしていたことがうかがえる。指針解説(2018)では、「保護者に対する子育て支援に当たっては、(中略)子どもの育ちの姿とその意味を丁寧に伝え、子どもの育ちを保護者と共に喜び合うことを重視する。」<sup>27)</sup>と示されている。本研究では、実際の障害児の保護者支援でもこの点が実践されていることがうかがえた。

## (4)気遣い

「前向きになることをなるべく伝える」「要望を一方的に言わない」など、5個(31.2%)の1次カテゴリが出現し、2番目に1次カテゴリ数が多かった。

園長経験者(3個:15.0%)、若手保育者(2個:15.4%)と比べると、中堅保育者の1次カテゴリ数が最も多く、出現率も最も高かったことから、中堅保育者がより障害児の保護者への気遣いを意識していたことが推察される。保育者の何かに気付き記憶された体験(「気付き体験」)を分析した吉田他(2015)では、「保護者と保育者のつながり」の「気付き体験」において、新任保育者と中堅保育者は少なく、熟練保育者ではやや多くなっていることが明らかになった<sup>28)</sup>。熟練保育者の中には、自身の子育て経験が保護者の立場や気持ちを理解することにつながったという回答があり<sup>29)</sup>、子育て経験が保護者への配慮や気遣いにつながる可能性がうかがえる。本研究の中堅保育者は子育て中の対象者が多かったことから、保育歴や職位以外にも、子育て経験が障害児の保護者支援に影響を与えることが推察される。

## (5)寄り添う

「保護者の辛い気持ちを分かるように意識している」「園に連れてきてくれたことをまず受け止める」の2個(12.5%)の1次カテゴリが出現した。

園長経験者では5個(25.0%)、若手保育者では2個

(15.4%)の1次カテゴリーが出現しており、中堅保育者の結果は若手保育者の結果に似ていた。園長経験者では最も1次カテゴリー数が多く、中堅保育者と若手保育者と比べて1次カテゴリー数が多く、出現率が最も高かった。指針解説(2018)では、第4章1(1)について、保護者に対する基本的態度として、「保育士等が保護者の不安や悩みに寄り添い、子どもへの愛情や成長を喜ぶ気持ちを共感し合うことによって、保護者は子育てへの意欲や自身を膨らませることができる。」<sup>30)</sup>とあり、保育者が保護者の気持ちに寄り添う大切さが示されている。本研究では、障害児の保護者において、保育歴や職位に関わらず、保育者が保護者の気持ちに寄り添っていたが、園長経験者でよりその傾向が強いことがうかがえた。そのため、「寄り添う」ことは、保育や生活上の経験、職位の影響、熟達が必要であるのか、分析が必要ではなからうか。

#### (6)障害に対する考えや意向を把握

「保育者に求めていること、子どもの伸ばしたいことを、過程を聞いて理解できるようにした」の1個(6.3%)の1次カテゴリーが出現した。

園長経験者では2個(10.0%)の1次カテゴリーが出現し、若手保育者では出現しなかった。この結果から、障害児の保護者に対して、「子どもの障害」に対する考えや意向を把握することは、保育歴などが影響を与えているのか検討することが必要ではなからうか。また、園長経験者、中堅保育者で出現したものの、1次カテゴリー数が少なかったことから、2次カテゴリー設定の妥当性について、対象者を増やして検討する必要がある。

#### (7)本音

中堅保育者では、1次カテゴリーが出現しなかった。園長経験者では、2個(10.0%)の1次カテゴリーが出現し、若手保育者では中堅保育者と同様に1次カテゴリーが出現しなかった。この「本音」について、園長経験者に特有のカテゴリーであるのかを明らかにすることや2次カテゴリー設定の妥当性について、対象者を増やして検討する必要がある。

## IV. まとめ

本研究では、障害児の保護者支援において、うれしかったこと、保護者の気持ちの理解や工夫につい

て、中堅保育者の回答に焦点を当てて分析をするとともに、園長経験者、若手保育者の結果と比較を行った。その結果明らかになった点を以下に述べる。

中堅保育者が障害児の保護者においてうれしかったことについて、6項目の2次カテゴリーのうち「障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成」「障害児の育ちを保護者と共有」「保護者の姿勢の変化」の3項目で1次カテゴリーが出現し、「障害児の保護者からの働きかけ」「保護者同士の交流」「障害児の成長を実感」では1次カテゴリーが出現しなかった。出現した2次カテゴリー数は3項目で、園長経験者と若手保育者の中で最も少なかった。「障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成」については、3者ともに最も出現率の高い2次カテゴリーであったが、とりわけ中堅保育者の出現率が高く、中堅保育者で出現した1次カテゴリーの約8割近くを占めた。このことから、「障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成」は、保育者が障害児の保護者支援においてうれしさを感じる要因であり、とりわけ中堅保育者にとって重要であることが示唆された。また、園長経験者と若手保育者では、園長経験者だけ、または若手保育者だけ1次カテゴリーが出現する2次カテゴリーがあったが、中堅保育者ではなかった。6項目の2次カテゴリーにおいて、中堅保育者だけ出現しているまたは出現していない2次カテゴリーは存在しなかった。この結果については、中堅保育者には若手保育者や園長経験者のような固有の特徴がないのか、または対象者の偏りによるものなのか、中堅保育者の人数を増やし、詳細な分析が必要であらう。

中堅保育者における障害児の保護者の気持ちの理解や工夫については、7項目の2次カテゴリーのうち「聞く」「子どもの様子を知らせる」「気遣い」「寄り添う」「障害に対する考えや意向を把握」で1次カテゴリーが出現し、「きっかけづくり」「本音」では1次カテゴリーが出現しなかった。「本音」は園長経験者のみの出現であった。中堅保育者では、「聞く」の1次カテゴリー数が最も多く、若手保育者と同様であったが、2番目に中堅保育者で1次カテゴリー数が多かったのは「気遣い」であり、「聞く」と出現率に大きな差がなかった。この結果から、中堅保育者が障害児の保護者の気持ちの理解のために、「聞く」と「気遣い」を特に意識していることが推察される。同様に出現率の上位2項目から考えると、園長経験者は「寄り添う」「きっかけづくり」、若手

保育者は「聞く」「子どもの様子を知らせる」ことを意識していることが推察される。

以上から、障害児の保護者支援においてうれしかったこと、気持ちの理解や工夫について中堅保育者の回答に焦点を当て分析を行った結果、うれしかったことでは「障害児の保護者との意思疎通や信頼関係の形成」が重要な要因となり、とりわけ中堅保育者でその傾向が強いこと、気持ちの理解や工夫については、中堅保育者、園長経験者、若手保育者で1次カテゴリー数の多い項目に違いがあり、中堅保育者では「聞く」、「気遣い」がその特徴としてうかがえた。しかし、今回分析に用いた2次カテゴリーは、園長経験者の回答から設定したため、中堅保育者や若手保育者で1次カテゴリーが出現しない項目があった。この点については、それぞれの特徴であるのか、それとも2次カテゴリーの設定の問題なのか、検証が必要であろう。加えて、今回先行研究等をもとに中堅保育者を設定したが、園長経験者や若手保育者より、設定に幅や曖昧さがあることは否めなかった。また、保育歴だけでなく、保育者の保育における経験や生活上の経験、出産や育児経験などの影響を踏まえて分析する必要性がうかがえた。以上を踏まえて、調査、分析をすることで、信頼性や妥当性を高めることが今後の課題である。

## 付記

岸本：I～IV

武藤：I～IVについて、草稿執筆や重要な専門的な内容に関する校閲を行っている。

## 注

(1)各割合(%)は、「今後の仕事と育児・介護の両立に関する研究会(第4回)資料(厚生労働省)」と「保育所等関連状況取りまとめ(平成28年4月1日)」(厚生労働省)、「保育所等関連状況取りまとめ(令和3年4月1日)」から、筆者が算出した。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省『厚生労働省の取り組みについて』今後の仕事と育児・介護の両立支援に関する研究会(第4回)  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/001074704.pdf>(閲覧日:2023年9月8日)
- 2) 前掲1)
- 3) 厚生労働省『保育所等関連状況取りまとめ(平成

28年4月1日)』

[https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukiintoujidoukateikyoku\\_Hoikuka/0000098603\\_2.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukiintoujidoukateikyoku_Hoikuka/0000098603_2.pdf)(閲覧日:2023年9月8日)

- 4) 厚生労働省『保育所等関連状況取りまとめ(令和3年4月1日)』  
<https://wrap.da.ndl.go.jp/iinfo=ndljp/pid/12862028/www.mhlw.go.jp/content/11922000/000821914.pdf>(閲覧日:2023年11月10日)
- 5) 前掲1)
- 6) 岸本美紀・武藤久枝(2020)「障害児の保護者支援に関する面接調査(1)—園長経験者を対象とした予備調査—」『日本保育学会第73回大会発表論文集』、pp.1049-1050
- 7) 岸本美紀・武藤久枝(2022)「障害児の保護者支援に関する面接調査その2—若手保育者を対象とした予備調査—」『日本保育学会第75回大会発表論文集』、pp.905-906
- 8) 岸本美紀・武藤久枝(2023)「幼稚園・保育園(所)における障害児の保護者に対する支援—園長経験者と若手保育者を対象に行った予備調査結果—」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』56、pp.11-20
- 9) 岸本美紀・武藤久枝(2023)「障害児の保護者支援に関する面接調査(4)—中堅保育者を対象とした予備調査結果—」『日本保育学会第76回大会発表論文集』、pp.589-590
- 10) 吉田満穂・片山美香・高橋敏之・西山修(2015)「保育経験年数からみた気付き体験の特徴」『岡山大学教師教育開発センター紀要』5(別冊)、pp.9-18
- 11) 前掲9)
- 12) 前掲9)
- 13) 岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・齋藤政子(1997)「保育者の評価に基づく保育の質尺度」『保育学研究』35(2)、pp.52-59
- 14) 前掲10)
- 15) 前掲8)
- 16) 前掲9)
- 17) 前掲8)
- 18) 前掲8)
- 19) 前掲8)
- 20) 前掲8)
- 21) 前掲10)
- 22) 岸本美紀・武藤久枝(2022)「幼稚園・保育園(所)における外国籍の保護者に対する支援—保護者の



- 気持ちの理解や工夫に焦点を当てて」『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要』55、pp.13-22
- 23) 厚生労働省(2018)『保育所保育指針解説』フレール館、p.328
- 24) 前掲 8)
- 25) 入江慶太(2013)「新人保育士が感じる保育の難しさとは何か—3 歳未満児クラスにおける検討—」『川崎医療短期大学紀要』33、pp.61-67
- 26) 前掲 23) p.333
- 27) 前掲 23) p.328
- 28) 前掲 10)
- 29) 前掲 10)
- 30) 前掲 23) p.329

### 謝辞

本研究にご協力いただきました中堅保育者の皆様に、心から感謝申し上げます。

